

佐々木 啓益 (ささき けいえき) 様

吉泉産業株式会社 代表取締役会長

はじめに

(会長) 「各界で活躍されている同窓生への会長インタビュー」は、各界でご活躍されている大阪大学工学部をご卒業された方々に、活躍の原点や努力の源、大学への思いなどのお話し頂き、インタビュー記事としてまとめ、大阪大学工業会のホームページ (Techno-Net) で公表させて頂いております。本日は、吉泉産業株式会社 代表取締役会長の佐々木 啓益様にインタビューさせていただきます。



佐々木様は、1979 年に大阪大学大学院 工学研究科冶金工学専攻 修士課程を修了され、同年ダイキン工業株式会社に入社され、冷暖房機の高効率コンプレッサーなどの開発に携わられていましたが、その後、実家でお父様が経営されていた吉泉産業株式会社に入社され、お父様とともに野菜などの万能スライサーなどの設計・製作に関われ、お父様が若くして亡くなられたことで、吉泉産業株式会社の代表取締役社長に就任され、その後、本年 1 月にご子息が代表取締役社長を承継され、会長職に就かれるまでの長きに涉って自社の経営にあたられました。その間、お客様の要求に応え、焼肉スライサーや野菜の鮮度を落とさないでカットする機械、更には整った形に魚を切ることができる機械など、他にない特徴ある装置の設計・製作など、高い技術力と工夫が独自の製品群を生み出すなど、確実な経営基盤の確立で、事業を大きく発展させ、また、多くの特徴ある機械の開発という高い技術力に対して、黄綬褒章、文部科学大臣表彰などで高く評価されています。

本日は、佐々木様の、大学での活動から得られたもの、更には企業経営の基本やそのあり方で大切にされてきたこと、更には学生さんなどへの学ぶ姿勢のあり方などについてのお話をお伺いさせていただきます。

ものづくりを目指して、「ご縁」を大切に思い冶金工学科で頑張ろうと

(会長) 本日はご多忙のところインタビューのお時間をいただきありがとうございます。佐々木様は冶金工学専攻のご出身で、実は、私は溶接工学専攻を修了し、佐々木様が学生時代には同じ材料系の建物にいたことになります。

(佐々木会長) へえーそうですか、私は冶金工学科で福迫先生の研究室にいまして、特に大中先生にはご指導を頂きました。鋳造関係の研究を行っていましたので、同じ材料系の建物で、どこかでお会いしているかも知れませんね。

(会長) 大中先生は亡くなられましたが、現役時代には色々とお世話になり、アモルファス金属の製造方法についてなど議論した思い出があります。

(佐々木会長) この1月に社長を承継しました長男も、実は工学部の**応用理工学科**に入学しまして、応用理工は機械系と材料系が一緒になっているとのことで、1年後の系の選択で、機械系にいけばと言っていたのですが、結局マテリアル系を選択し、親子で同じ分野の学科ということになりました。そのようなこともあって、修士論文の提出を終えた時に一度見に行こうと思って行きましたが、材料系のR棟の建物はあまり変わってなく、同じ5階の研究室（藤本研に変わっていましたが）で、全く同じ研究室の部屋で長男も居て学んだと言うことで、懐かしくも感慨深かったです。

(会長) そのような状況からも大阪大学工学部との繋がりを感じられます。お話し頂きましたように佐々木様は工学部の冶金工学科に入学されたのですが、冶金工学科を目指された動機などお話し頂けますか。

(佐々木会長) ご承知のように、私は、当社**吉泉産業株式会社**の二代目なので、家業の関係からも、工学部の機械工学科を目指していましたが、残念ながら第二志望の**冶金工学科**に入学することになりました。その時には、少し忸怩たる気持ちもありましたが、大阪大学に入ったのですから、当初の想いと専門分野が違うだけで、高いレベルで学ぶ場を得られたということで、材料であれ、機械であれ、「ものづくり」を目指すということでは同じであると感じ、意識を高めて臨みました。

ただ、長男には機械工学に行けよといっていました、応用理工学科に入って、今は材料の方が良いのだということで、マテリアル系を選択し、結局親と同じ道をとということになったのです。

このようなことで、いろいろな面で「**ご縁**」があり、その縁は大切にすることが重要と思っています。

何が起こるか分からない中で、必要なのは自らの成長への想いと元気さ

(会長) 冶金工学科を卒業後大学院で冶金工学専攻に進学されたんですね。

(佐々木会長) それもいろいろいきさつがありまして、大学時代の4年間は**ボート部**でボート漕ぎでしたので、少しは休みたいなあとの思いで大学院に進学しようと思いました。ただ、大学ではボート部専属でしたので、成績も良く無かったのですが、大学院入試となると試験があり、夏休みを挟んでにわかに3ヶ月ほど、猛勉強しました。

(会長) そうですね、当時は入試も厳しくて、入試勉強を猛烈に行って、その時に勉強したことが一番身についていて、インタビューさせて頂いた卒業生の方でも、その当時の勉強したことが今も役立っていると話される方もおられました。

(佐々木会長) その猛勉強の結果、大学院入試では成績が**3番目**ということで、周りを驚かすことに。入試という機会、猛勉強することも良いことですね。

(会長) そして大学院修士課程を修了後に、**ダイキン工業株式会社**に就職されましたが、その時の経緯や思いは。

(佐々木会長) 就職についてもいろいろありまして、当時は自動車会社の人気が高く、自動車会社へ行きたいとの想いで、自動車だとトヨタ、日産よりは**本田技研**の自由闊達な雰囲気があるということで、良いかと思い、学校推薦も本田技研で得ることになりました。ところが、親の方が**ホンダ**の狭山工場のような遠いところに行くなという話になりました。たまたま、ダイキン工業の山田社長の隣に住んでいる親戚がいて、一度面接に行ってみてはということで会社に行くと、その日の夜に、採用ということになりました。お願いしたことからもダイキン工業に行くことにしましたが、大学推薦が決まっていたから、福迫先生には、折角推薦状も書いていたのに顔を潰すのかと、大変お叱りを受けることになりました。

(佐々木会長) 世の中何があるか分からないのが常で、機械系と思っていたところ冶金に入り、ホンダと決まっていたところがダイキンに入るようになったというように、**何が起こるか分からない中で**、どう成長するかが問われているということですね。後で振り返ると、大きな変化の中で進んできたなののも実感です。

変わるということは常ですが、変化の中で何を目指し、そのためにどう動くかが課題でしょうね。大阪大学も、最近は総長先生からの話を聞いていると、世界一を目指すとか常々お話になりますが、大学を取り巻く環境は大きく変わってきていて、その評価には課題も見えますが、やはり必要なことは、その変化の中で、**世界一を目指そう**とする元気が大切です。自分の変遷の話から少しそれましたが、どう変化しようが、その元気さだけは維持してきたつもりです。

(会長) そのような経緯があったのですか。当時は、まだダイキンさんもそれほど大きくはなく、電気系会社のエアコン部門の後陣を拝していたというところで、ある意味、発展途上だったかと思いますが、ダイキンではどのような部署に入られたのですか。

(佐々木会長) ダイキン工業での配属は、滋賀県の住宅空調の部署で、入社したときの人事部長が、本年会長を退任されるようですが、ダイキンの中興の祖、カリスマの井上礼之さんでした。

ダイキンでは、**コンプレッサー設計**の仕事をしていました。その当時は、ピストン運動によって冷媒の吸入と圧縮を行う**レシプロ**のコンプレッサーでした。それを**ロータリーコンプレッサー**に変えるという流れになっていて、ロータリーコンプレッサーの開発が仕事でした。その当時、冷房能力と暖房能力が求められ、冷房については高い能力があるのですが、暖房にすると冷えた風しか出てこないというので、その当時は暖房のためにヒーターをつけていたのです。ヒーターの熱源が馬鹿ならずエネルギー効率が非常に悪い状態でした。そこで、**インバーター**をつけて、回転数を、冷房と暖房で変えようという開発のグループに入りました。インバーター付きのロータリーコンプレッサーの開発研究を行い、社長賞を頂くことができました。ダイキン工業には5年ほどしかいませんでしたが、満足な仕事ができたと自負しています。

企業規模を大きくすることへの想い

(会長) その後、実家の吉泉産業株式会社の方に戻られたのですが、どのような経緯で。

(佐々木会長) ダイキンで働きながら色々と考えましたが、当時も従業員が5,600人いましたが、世の中に出て、課長、部長へと昇進していけるのだろうか、よほど一生懸命しないと昇進できないだろうなど

考えたのです。サラリーマンの世界は、楽なところもあるけど厳しいところもありなどと考えていました。その当時、父親が食品機械の会社を小さいながらも経営しておりましたが、ダイキンなどに比べたら規模の小さな会社で、やはり大きな会社での働きがいや地位の向上をと考えていました。

ただ、ダイキンでロータリーコンプレッサーの開発を進めながらも、大きな成果に結びつく様な状況にもなく、そのような中で、父親の小さな会社ではあるが、自らの思いが通ずるようなところで勝負をしたいと考えて、帰ろうと決断しました。

(会長) その後お父様が亡くなられて事業を承継されるのですか。

(佐々木会長) 実は、帰ってきたのが 30 歳で、37 歳の時に父親が亡くなり、若くして社長を承継することになったのです。

(会長) その 7 年間、お父様と一緒に事業をされていましたが、その間で何か生きた経験がありますか。

(佐々木会長) そうですね、大学やダイキンで学んだいろいろなことが、折々に役立つことを実感しました。規模が小さく、当然従業員も少ない中で、それまでに学んだことが、時として役立つことがあるとの実感です。

(会長) その後事業承継をされるのですが、突然だったのですか。

(佐々木会長) そうです、脊髄にガンができて、発見から七、八ヶ月で亡くなりました。そして社長を引き継いで、現在 71 歳ですので 34 年間社長を務めたことになり、今年 1 月に長男に社長を譲りました。やはり「若い人に引き継いでいかないと」と考えて。

若さは「パワーの源泉」なので、色々と思いがありますが、次の世代に委ねることにしました。

(会長) 37 歳の時に承継されたときに、何かこれは行おうと思われたことはありましたか。

(佐々木会長) そうですね、当時はまだまだ会社が小さかったので、大きくしたいとは思いました。ダイキンでは、多くの人々を見て、また優秀な人も多くいましたので、大きさは必要と感じました。

先人の松下幸之助さんや京セラの稲盛和夫さんなどのように大きな企業に育て上げられた方々を見ると、やはり、協働で作り上げる頼りになる仲間の人々が二人、三人とおられたように思いますが、そのような力は、残念ながらありませんでした。しかし、父親の時代は売り上げが 1 億円ぐらいでしたが、今は 30 億円となり、従業員も 100 名以上までに、関連会社を含めると 200 名規模まで育てることができました。

稲盛さんが主催しておられた「盛和塾」に 20 年間ほど参加させて頂いていましたが、幸之助さん、稲盛さんの業績とは比べ物にならない自分がもどかしく、でも、自らの実力はこんなものかとも思っています。

ただ、この状態まで成し遂げたことの自負もあり、次は元気の良い若手の長男に譲るときかと考えました。幸い息子がやる気になっており、やはり譲ることが、今後の発展には必要との想いです。

「ものづくり大好き」が革新的デザインの原点：発想力を活かした独自のデザインで勝負を

(会長) このように規模を大きくされてきたのですが、事業の内容の大きな特徴はフードスライサーの開発であると思いますが、その商品開発で特に意識して目指された点はどこにあるのでしょうか。

(佐々木会長) 結局、ものづくりを行っているのですが、食品機械をつくるにしても、基本は「デザイン」にあって、いまだに設計をすることが一番大きな業務になっています。

もちろん、会社が儲けて伸ばしていくという経営は中小企業にとって重要なポイントではあるのですが、私としては、結局のところ、自分が好きな「ものづくり」の方に力を注ぎ、新規のお客様が困っていることに対して、新しい設計を行って良いものを作り上げることに力点がいてしまいました。

(会長) これまでに開発されている食品機械を見ると、非常に得意ともいえる性能を実現されていて、工夫の跡が見られると感じますが、そのポイントはどこにあるのでしょうか。

(佐々木会長) 最大のポイントは、ものづくりでお客さんに喜んで貰うことに拘っています。お宅の機械はこんなにも良いものですかとって頂くことが最大の喜びです。

特に意識していることは「二番煎じは絶対に造らない」ことです。どこかのものをコピーして、それより少し性能を上回る様な機械を造るようなことはしませんでした。大手の企業ではそのような取組をしている例が多く見られ、少しの差で特許を先にとったとかで競争していることが良くありますが、その開発姿勢は絶対に避けました。小さな会社ですので、**発想力で勝負**できることを目指し、この方針がすごく良かったと感じています。

その原点は、父親が開発したときに遡ります。街のうどん屋さんでネギを切っていて、このネギを切る機械を造ってくれないかと聞いて、そこから食品のスライサーの機械の生産を始めました。その時に、今まで苦勞して手で切っていたのが機械で綺麗に切れるというので、お客さんのうどん屋さんは大変喜ばれたとのことで、これが我が社の正に原点なのです。当然、その時には私は居合わせていませんでしたが、その後、私が設計した機械で**お客さんの喜ぶ顔を見ることが最大の喜び**です。お客さんからこの機械は「カッコ良いやん」と言ってもらえることで喜びが増します。

(会長) そのような喜びを得られるためには、やはり造られる機械への工夫が必要ですが、そのような発想の原点はどこにあるのでしょうか。

(佐々木会長) その原点というかどうか分かりませんが、私は、兎に角、ものづくりが小さい頃からすごく好きだったのです。その「好き」が原点でしょう。

【特許】YS-3100XD 切り身の定貫スライサー



・1切れずつ重量が揃うように計測



・特許状



フードスライサーのエキスパート
YOSHIZUMI



昔は、小学校では夏休みの宿題などで**工作**を行っていましたが、他の宿題は置いておいて、兎に角、工作を一生懸命行い、出来上がった工作を持って行くのが楽しみでした。

思い出しますと、小学3年頃だったと思いますが、最近ではゴミ箱の蓋を開けるのに足踏み式になっていますが、当時まだ多くは無かった時代に、自分で「この原理」を使って機構を考えて、足踏みで蓋が開くゴミ箱を造って持って行ったことがありました。学校へ持って行くと、皆が「すごい」と賞賛の声で、その反応がうれしかったですね。

また、その当時「科学と学習」のような本を読み込んで、例えば、電気モーターを造ったこともありました。それも手に乗るような小さなものでなく、でかい

ものを造ろうと考え、幸い実家が鉄を扱っていたので、鉄心などの材料もあり、大きな鉄板を自分で切って、それにニクロム線を巻いたりして大きなモーターを作り、それを持って学校へ行きました。そうするとその大きさに皆はびっくりして、また賞賛の嵐でした。このように、同じ造るなら、おもちゃのようなものでなく、本物を作りたいとの考えがあり、何か機構的に工夫が必要なものに取り組むことが好きだったのです。

(会長) なるほど、ないものや大きなものを造ろうという発想と、造ったときの周りの反応を楽しまれ、それが、また、次の新しいものに挑戦しようという気持ちを高めることに繋がっていったのですね。

(佐々木会長) そうですね、あの頃の皆が驚くようなものを造り、それが皆から賞賛されることから、今の、お客さんに喜んで頂けるものづくりの原点といえるかも知れません。

(佐々木会長) その子供の頃の環境も、実家は鉄工の仕事で、お隣は畳屋さんで、またその隣には竹細工屋さんもあり、竹を頂いてきて椅子を造ったこともあり、ものづくりが好きで、それを楽しむ良い環境にあったともいえます。

特に、夏休み明けには、自分の造ったものを抱えて登校し、皆から**驚き**の声を聞くことと、**褒めて貰うことが最大のモチベーション**でした。周りに期待をいだかせて、次はどんなものを持ってくるのを楽しみにしてくれていて、皆が楽しみにしてくれていこともうれしいことでした。

その当時には「**ものづくり**」というような言葉も一般的で無く、自分で造ることが当たり前だった時代だったので、その中で、**自分で造ることが好きだった**ことが、今の原点かも知れません。

一から全て自社生産することでリスク回避ができ、また新しい展開のためにはAI 技術も自社で

(会長) ただ時代がそうであったとしても、誰もが行っていたということではなく、佐々木さんの大きな熱意と新しい工夫があってこそ今があるということでしょうね。

お話しのような熱意、ものづくりへの想いが今の食品機械を開発されたのでしょうか、野菜、更にはお魚などにも広げられていますが、機械を開発する上で一番配慮された点は何でしょうか。

(佐々木会長) 私の入社時は20名ぐらいの従業員でしたので、先代の社長は、お金を出すのは嫌だ、中小企業は、もし部品など仕入れてこれでいけると思っても失敗したときは潰れてしまうのだということで、原材料だけ買って来て、設計から製造、検査まで全て自分で行うことが基本方針でした。

先代ともめたことは、例えば、先代は、変速機はベルトを横に動かす方式で自作していたのですが、私はもっと精度の良いものを買って来て取り付ければ電動で簡単にできるので、買って取り付けたのですが、先代は血相変えて怒りました。そんな部品を買って来ては、それを造っている会社を設けさせるだけではないか、との話でした。最初はこの様な事例で、揉めた事もあったのですが、自分が経営を担うようになって、気がついたら、先代と同じことを言っていました。

自作していたら、例え失敗しても材料は残り、修正加工して活かすこともできるので、今でも、部品加工なども全て自社で行っています。このように、構造設計、電気設計、さらに詳細加工なども自社で行うことが基本です。

更に、大きな経営方針は、営業活動は**お客さんと直で行う**ことです。間に商社などが入ると、商社を儲けさせるだけで、機械を開発して直売し、メンテナンスも自分らで行うことを自社のポリシーとしています。

このように一から全て自社で製造すれば、失敗してもリスクはないということが先代からの教えです。

(会長) 食品機械の今後の展開で何か考えておられることはありますか。

(佐々木会長) 現在製造している食品機械においては、今注目のAI技術は非常に有用で、食品機械と親和性が高いと思っています。そのAIの活用についての開発も、自社内で行っています。

機械屋で仕事を行っている自社のようなところではAIは難しいと考えました。ところが、AI技術を外注すると3,000万円から5,000万円ぐらい出して貰わないということで、とんでもない経費がかかります。外注する手はあるのですが、食品機械の特殊な内容を行って貰っても、アイデアは他社に流れてしまうだけになります。それなら自社でと、開発する人を探してこようという事になりました。ところが、すぐ、社長が探してきました、現在、自社でAI技術の応用を

考えております。また、社長も材料系ではありますが、自ら勉強して、例えば、白菜の芯を抜く位置決め、これまでは画像処理を活用して位置決めなどを行っていましたが、AIを応用することで芯抜きのためにはより最適な位置決めなどができることを見つけてきて、AI技術の活用を考えるに至っています。これは、長男の社長の手柄でしょう。

食品スライサーなどでは、切削するものが必ずしも同じ条件のものでないので、料理人は目で確かめ判断してスライスしていることを再現するにはAI技術は非常にマッチしたもので、今後の展開が楽しみです。

この例のように、人に頼らずに、自らの力で解決・開発することをモットーとしています。



(佐々木会長) 自ら行ふと言うことでは、今日この部屋に上がって頂くのに、らせん階段を上っていただきましたが、この事務所を造るときにらせん階段のステンレスの手すりを外注すると 500 万円だというので、それなら自社でつくるといって、私が設計して 30 万円で造りました。これも自社でやり遂げるという一つの例かと思っています。

中小企業にとっての産学連携は

(会長) ただ、人材などの問題で、自社だけでできないこともあろうか思われますが、その場合にはどのようにされてきましたか。

(佐々木会長) そこは産学連携に期待です。

今、魚の切り身の機械を造っていて、画像処理を使っているのですが、たまたま縁があつて、大阪工業大学の情報工学部が枚方にあつて、そこの先生と懇意になつて、色々と指導を仰いでいます。また、学生さんも来て頂いています。単に画像処理と言っても、私たちが分からないところも先生からすれば、こうすればとの答えを頂けます。このように違ったものの見方を頂けることは大きなヒントとなり、助けて頂いたと実感しています。

ここは津田サイエンスヒルズと言うところなのですが、ここにも大阪大学の自由電子レーザー研究施設がありますが、そこの施設長をしておられた堀池先生にも助けて頂いています。

(会長) そうですね、思い出しましたが、その自由電子レーザー研究施設は、産業界で自由電子レーザーの研究会があり、研究施設を運営されていたのですが、その施設と土地を阪大に移管するという話があつて、丁度私が研究科長の時代に、土地は大阪府から購入し、施設は阪大に移管することを進めました。土地については、大阪府がバブルの時代にかかなり高額で購入していたのですが、当時の地価で購入することで、堀池先生がかかなり交渉に尽力されて購入したものです。学内でも手続きなどで色々問題があり、当時こちらまで来たことが思い出されました。ただ、20 年程前のこの辺りは、まだまだ空き地が多くて、当時とは隔世の感がありますね。

(佐々木会長) そのようないきさつだったのですか。私がこの工業団地の会長をしているときにも堀池先生にはお世話になり、工業団地運営の総会などにも出て頂いていました。

その折などに、レーザーが鉄板などを切ることに広く使われていますが、あれだけうまく切れるのなら食品も切れるはずで、例えば、冷凍の魚をスパスパと切れれば、鮮度も保持できるし良いのではということで、堀池先生ともかなり議論させて頂きました。ただ、レーザーの活用については少しレベルの高い話も多くて、単に魚を切ることに使えないかとの話は、まとまるまで活きませんでした、いまだに何とか使い道はないかと考えています。

このように、近くに話ができる大学の先生がおられることはありがたく、大学の産学連携部門があるのは中小企業にとってありがたい話です。

ものづくり一筋、秀でたものづくりが評価されたことのありがたさ

(会長) いまお話し of 機械の開発 には、「人」が非常に大切かと思いますが、人材に関してはどのようにお考えですか。

(佐々木会長) 私が力を入れているのは**設計**で、我が社の機械は設計が中核になりますので、設計の人材を何とか育てたいというのが私の最大の想いです。そのために、現在も何人かのグループをつくって話し合いをすることを行っており、こんな考え方がある、こんなことを既に行っている、こんなことで良くなるのでは、など意見を交わすことは人が育つ原点でもあり、このような形で人を育てることができ、そのような場を非常に楽しく感じています。このように人材を育てることが私は好きなのだと感じています。

今は会長職で、なるべくいろいろな経営には口を挟まないようにしようとは思っているのですが、設計に 20 人ほどいるのですが、4, 5 人を私に頂いて、ものづくりの設計を共に考え、議論することをライフワークとして進めさせて欲しいと要求しています。

私自身は、これまで、ものづくりに精力を注ぎ、経営と言うよりはものづくり技術に力を入れてきたようなところがあり、もし、もっと経営に力を入れていれば、もっと大きくなっていたかと思うところもありましたが、ものづくりの設計に拘ってきたことは、私の生きがいでもありました。

(会長) そのような拘りというか、**熱意**が、黄綬褒章、文部科学大臣賞はじめいろいろな技術が評価された賞を受賞されているわけですね。

(佐々木会長) そうですね、そのように評価頂いたことはありがたいことです。

急に大阪府の方からお話しがあつて、何ですか、と聞くと、**黄綬褒章**が授与されるということで、これまで褒章や勲章などには全く縁が無かったので驚きでした。ものづくりで特許もかなり出していましたので、**一芸に秀でた人**という評価で頂いたようです。その時に同時貰った方々は、一芸に秀でたということで、文部科学省で、建築設計の隈研吾氏、漫才のオール巨人・阪神、歌手の石川さゆり、囲碁の趙治勲、など著名な諸氏とご一緒に頂きました。

(会長) やはり、それまでの多くのものづくりへの新しい試みや他に類を見ない工夫の成果が、高く評価されたということで、素晴らしいことだと感じます。

(佐々木会長) このような賞は長く務めていたら、順番にもらえるものと思っていました。ただ、いま商工会議所の副会頭を務めているのですが、そのメンバーから、ただ単にものづくりで黄綬褒章などはもらえるものではなく、やはり一生懸命、**新しいものづくり、他より秀でたものづくり**をしたからだと言われて、このような評価を受けたことがそんなに値打ちのあることかと、喜んで頂きました。

授賞式に行って、先ほど上げた有名な方々と一緒に受賞したのですが、それ以外にも、壁塗り職人一筋で赤壁ぬらしたら右に出るものがないという様な、その道ですごい人がおられて、周りの受賞者をみて、評価されたことが本当にすごいことなのだと感じてうれしかったです。

「日本でいちばん大切にしたい会社」と評価されて：家族経営で働く環境の整備を

(会長) このようにものづくりのこれまでのご業績が評価されたということですが、もう一つ大事なポイントは、やはり**ものづくり人材**を育てられたことも高く評価されているかと思います。

ところで、現在の社会状況から見て、現在 100 人ほど従業員がおられるということですが、次なる人材を得ることは難しくなっている感じもしますが、人材の採用、あるいは社員に対する配慮などで、何か特別なことを行っておられますか。

(佐々木会長) 採用に関しては、それほどうまくいってないのが事実です。ただ、**人を大切にする**ということで、「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞の審査委員会特別賞を頂きました。どのようなところがこの賞を取っておられるかというと、長野の伊那食品のように、寒天だけで生き残っているのは唯一だろうと言われ、寒天だけで人を大切にする企業ということや、お多福ソースの特徴ある企業や、大きなところではライオンなども貰っておられますが、中小企業で人を大切にしている企業が評価されたようです。

我が社としては、今更なのですが「**家族経営**」を目指したいと考えています。幸之助さんなども元々家族経営だったかと思います。しかし、大きくなりすぎて、いつからか経営方針が変わったかと思いますが、幸之助さんが亡くなられて、業績が悪くなったとき、リストラを行うと株価は上がりますから、リストラをとということになっていったようです。丁度食品機械の市場のスケールはそれほど小さくなく、まだ拡大を考えていますが、企業経営の形態として家族経営を維持していけると考えています。現在 30 億円規模で、長男には 100 億円規模まで拡大するようにと、期待はしていますが、食品機械の市場では、十分に従業員を大切にする家族経営の形が取れると考えています。

(会長) ここは津田サイエンスヒルズという企業団地ですが、その働きの方への街づくりにも活躍されているそうですね。

(佐々木会長) そうですね、**街づくり協議会**の会長を最近 10 年以上もしているのですが、この津田サイエンスヒルズで働く人々にとって、素晴らしい環境となるように施策を考えています。

例えば、ヒルズの 10 周年の時に**桜の木**を植えようと提案し、大阪府の協力もあって 200 本ほど植え、桜の名所になっていますし、**働く環境の整備**にも力を入れ、大阪府の環境優良賞を貰い、その後、国交大臣賞も受賞しました。このように働く環境整備には力を入れております。

(会長) 確かに、大阪大学が自由電子レーザー研究施設の土地を購入したときには、京阪奈学研都市の一部ということだったかと思いますが、ほとんどの土地が空いていたように思います。今の企業の集積の環境とは隔世の感ですね。そのような街づくりに貢献され、評価を受けているということですね。

(佐々木会長) **働く環境の整備**という点では、5 年ほど前に安倍首相のときに保育園が足りないということが問題となりましたが、このヒルズには従業員が 1000 人ほどいますので、保育園を造って欲しいと市にも言っていたのですが予算がないということだったのですが、安倍首相の**企業内保育園**をつくっても良いという施策で、企業内保育園一号で手を上げて、自社の食堂の下のところにつくりました。このような諸々の活動も黄綬褒章として評価されたのではないのでしょうか。



(会長) 働く環境の整備などに尽力されていることは分かりました。

ただ、先ほどもお話しが出ましたようにAI技術、更にはGXなど、企業を取り巻く環境がかなり大きく変化してきているかと思いますが、このような企業環境の変化を企業経営の観点からどのように考えておられますか。

(佐々木会長) これまでもそうでしたが、世の中は変わっていくもので、変わっていつて進化し、そこで生き残るものだけ

生き残っていくでしょう。これまでの変化を見ると、人間も際限なく便利さを追求することをしてきたように思います。この人類の進歩は、私は当たり前だと思っています。その変化への対応については、人間は一人では生きていけず、共生が大切で、それが忘れられているのではと感じます。例えば、原始時代に狩りをするにしても、獲物を追うときは、お互いの役割を意識して、それを果たすことで、適切に追い込んで仕留めることを共同で行ってきたのです。このよう共生が生活を支えてきました。また、食事にしても、一品で無く、あれもこれもと楽しめる広がりは一人ではできず、皆で作りに上げてきて、人々の喜びをもたらしたのです。食事については、我々の子供の時代は、カレーと言えばそれ一品でございそうだなと感じていましたが、今や、カレーだけかと言います。カレーも餃子も魚も食べているかも知れませんが、それも多くの人の力で得たものです。大事なものは、皆でよりよい便利と楽しさをつくっていくことで、それによって、食べ物ではもっとおいしい物をとというような、よりよい生活を目指すという共生でないとダメだと思います。

あまりにも具体的な例の話をしてしまいましたが、やはり「共生」が基本で、ものづくりにおいても、その点への配慮が欠かせないでしょう。大事なところは、互いに刺激し合いながら、よりよい方向を目指すことに互いに協力して行くことが重要でしょう。

これからの変化しつつある社会にあって、基本の「共生」を忘れないことが、企業経営でも大切と考えています。

集中力が大切：何かで一番になろう

(会長) 基本的な考えについて大事なポイントとして「共生」の重要性をお話し頂きました。

それでは、少し遡って大学時代のお話しをお伺いします。学生時代はボート部に所属されていたようですが、クラブ活動で得られたものや、クラブ活動で学生さんに意識して頂きたいことなどがあればお話し頂けますか。

(佐々木会長) 昔と今とは違うのですが、守口のボート部の艇庫をぶらりと訪れて、乗ってみたいなと言われて乗ると、スーと川面を進む様子で、これはすごいなと感じてボート部へ入りました。結局4年間ボート漬けで、3年から4年への時には200日も合宿していました。練習で疲れて、合宿所ではテレビ

さえも見ず、漫画本などを読むぐらいで寝ての日々で、結局大学へもあまり行くことも無く過ごしましたが、そのようなことが通じる時代でもありました。

ただ、一つのことにひたすら取り組んだことは良かったと思っています。

(会長) 精魂打ち込んでクラブ活動をされたのですが、その後修士課程に進まれましたね。

(佐々木会長) ボート部に打ち込んだ学部生活だったので、少し休憩だと思って大学院へ。当時は6, 70%の学生は大学院へ進学していました。

前にもお話ししましたが、学部の成績は最低に近かったですから無理だと言われながら、入試の三ヶ月間ほどは、過去問など猛烈に勉強し、入試の成績は3位と好成績で通りました。周りはびっくりし、「やればできる」を実証しました。

今の学生さんは真面目で、一生懸命に物事に取り組んでおられることはよく分かります。ただ、力の入れ方は粗密があっても良いのではないのでしょうか。やらなければならないことが見つかり、そこに最大限の力を注ぎ込むことも必要です。集中というのは何かで一番になることで、そこに力を入れなければなりません。

一つのことを集中してやることは大切であり、何かで一番になるだけの集中力を大学時代には養って欲しいですね。

(会長) そのような学ぶ姿勢を植え付けることは、子供の時代が大切でしょうね。

(佐々木会長) そうですね、子供は小学校低学年までが勝負で、色々と親が言って吸収しようとするのはその頃までで、子供達についても良い教育環境を与えると言うことで、小学受験をさせ、親も努力して3人とも教育大付属に入れました。ほぼそこで親の責任を果たしたようなもので、その後は本人が、集中力を養ってくれるかですが、幸い長男は大阪大学でマテリアル工学科を出て、事業を任せられるところまで成長してくれ、今後の事業発展を進めてくれることに期待しております。

大阪大学はクラブ活動の環境を高める努力などで、全てでトップに

(会長) そのように親子で同じ学科というのも縁でしょうね。その縁を感じられて大阪大学に望まれることはありますか。

(佐々木会長) そうですね、大阪大学が人を育てるという意味で、クラブ活動も支援はしておられるのですが、どうもクラブ活動の環境が良くないですね。例えばボート部の艇庫を見ても50年前のままで、トイレは匂うし、とても生活できる空間ではありません。雑魚寝しているようでは、勉強できる環境ではありません。京大、東大、特に東大の艇庫は、それは素晴らしく、3階建てで、4年生には部屋さえ与えられるのです。

私としては、今の学生さんには少しでも良い環境で活躍して貰いたいと思い、何とかして貰いたく、卒業生や後援会の方々と話をし、新艇庫建設を大学の方にも申し入れをしております。私としても、ボート部が近年優秀な成績も上げておりますので、大阪大学未来基金として寄付をさせていただきました。これまでに未来基金へは3回寄付させて頂いており、1回目は親子とも工学部を出ましたので工学部へ、2回目はクラブ活動支援ということで、ボート部と息子が入っていたアイスホッケー部へ、そして3回

目は、合宿所の創設の資金として使って頂き、クラブ活動の充実した環境の整備を進めて貰いたいと願っています。

兎に角、**新しい合宿所の建設**をなんとしてもお願いしたいですね。

(会長) 大学も昔に比べて学内のいろいろな設備の充実を図っていますが、何しろ国からの予算は期待できません。ましてやクラブ活動の環境整備などについては、かなり厳しい状況でしょうね。その中であって、卒業生からの寄付などは大いに期待しているところでしょうね。

(佐々木会長) 合宿所については、現在他大学の状況もまとめており、東大、京大、特に東北大などは、わざわざ埼玉の戸田に合宿所をつくっており、このような現状を調査した資料も準備させて頂いて、大阪大学の設備がいかに劣っているかを、訴えることを続けています。

大阪大学はいろいろな面でアピール不足のように感じますので、研究のみならず大学の活動をもっとアピールして頂きたいですね。

(会長) いまも、大学の環境整備についてお話を伺いましたが、大阪大学の教育研究活動について、何かお話ししておきたいことはございませんか。

(佐々木会長) やはりですね、自分は一番になれていないのですが、大阪大学には、世界でトップテンの目標を掲げておられるようですが、全てとは言いませんが、ある分野で「**キラリと光り**」トップになるという気持ちを持ち続けて頂きたいですね。高いレベルにはありますが、全てでトップということではなく、光る分野のあることを見せて頂きたいですね。それが**阪大ブランド**として評価されることが望まれます。是非「阪大ブランド」の強化が目に見えるようになること願っております。

おわりに：「素直になれ」

(会長) 少し時間がたちましたが、最後に、皆様にいつも伺っているのですが、佐々木さんが大切にしておられる言葉や座右の銘などがあればお教えください。

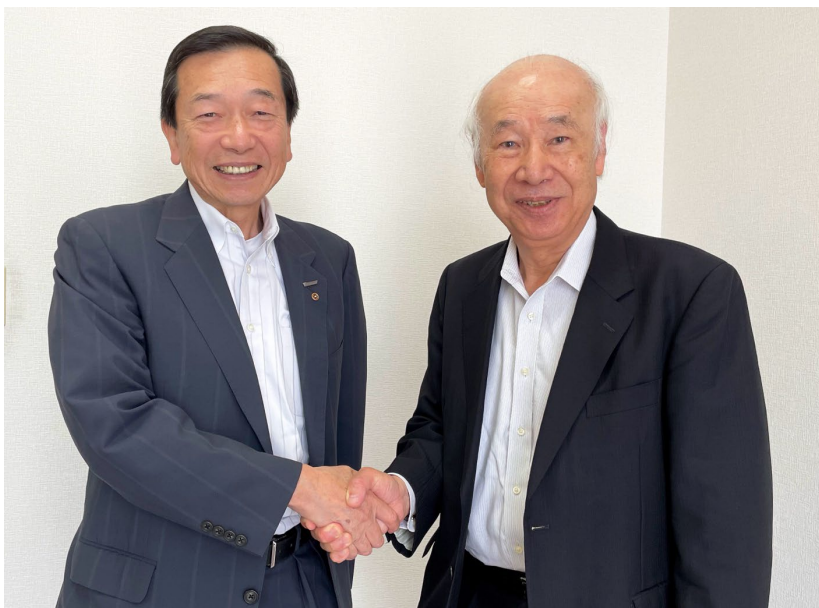
(佐々木会長) そうですね、松下幸之助さんの言葉ですが、「**素直になれ**」を信条としています。技術屋は、えてして**拘りが強い**のですが、自分を振り返って素直になり、考え直すことが大切です。世の中一人で活きているわけで無く、素直な気持ちで接することが一番ですね。

また、稲盛さんがよくお話されていたことですが、

人生・仕事の結果＝考え方×熱意×能力

であると。このうち能力と熱意は、それぞれ0点から100点まであり、これが積で掛かるので、能力を鼻にかけ努力を怠った人よりは、自分には普通的能力しかないとあって、誰よりも努力した人の方が、はるかにすばらしい結果を残すということです。そして、考え方にはプラスとマイナスがあり、最後にマイナスの考え方していると、世の中に禍根を残してしまうことになります。やはり、素直になって、人間としての正しい考え方をもち努力することが何よりも大切でしょう。

(会長) 本日は、どうもありがとうございました。



(参考)

佐々木 啓益 (ささき けいえき) 様

吉泉産業株式会社 代表取締役会長

経歴

【学 歴】

1972 年 3 月 大阪府立市岡高校卒業
 1977 年 3 月 大阪大学工学部 冶金工学科卒業
 1979 年 3 月 大阪大学大学院工学研究科 冶金工学専攻 修士課程修了

【主要略歴】

1979 年 4 月 ダイキン工業株式会社入社
 1983 年 4 月 吉泉産業株式会社入社
 1990 年 8 月 吉泉産業株式会社 代表取締役社長
 2024 年 1 月 吉泉産業株式会社 代表取締役会長

【社外・団体役員】

2019 年 11 月 北大阪商工会議所 副会頭
 2024 年 7 月 交野ロータリークラブ会長

【表彰】

2015 年 4 月 文部科学大臣表彰
 2019 年 5 月 「黄綬褒章」受章
 2022 年 3 月 第 12 回「日本でいちばん大切にしたい会社」大賞 審査委員会特別賞

【インタビュー後記】

インタビューは、大阪大学 共創機構 渉外部門 の吉田さんに車で津田サイエンスヒルズの吉泉産業株式会社まで送っていただいて、本社でさせていただいた。なんとなく津田サイエンスヒルズへは来たような気がしていたのですが、20年近く前に自由電子レーザー設備が阪大へ移管されるという話で、その土地を大阪府から購入することになって、総長や理事先生と現地調査にも来たことが思い出されました。ただ、当時とあまりにも景色が異なり、津田サイエンスヒルズの工業団地への入居会社が増えて、当時の面影はありません。吉田さんのお世話で、吉泉産業株式会社の佐々木会長様を紹介いただいたときに、津田の地名から全く思い出せませんでした。

佐々木会長様は、お話しのように食品機械の特異な分野で、お客様が喜ばれる顔を見たくて、それぞれに対応する機械の設計・製作をされています。しかし、工学部では材料系の出身であるものの、「ものづくり」にのめり込むほどの強い想いで、他に例をみない設計を行い、全てを自社製作するという事業方針で大きなシェアを確保しておられる特徴ある事業展開をされていることがよく分かりました。子供の時からものづくりが好きで、人が驚くものをつくることに喜びを感じておられたようですが、ものづくりを愛する気持ちが特徴ある事業の展開に繋がってきていることが伺えました。

インタビュー後に、少し離れた津田サイエンスヒルズで一番高い位置にあり見晴らしの良い食堂へ車で移動して、昼食をご一緒させて頂きました。非常に綺麗な食堂であり、質の高いランチ定食をごちそうになったが、この食堂は自社の社員のみで無く、時間差をつけて他社の人も入れるようにしておられる。この食堂の下が、話のあった保育園で、この食堂や保育園など見ても社員を非常に大事にしておられることがわかりました。

インタビューでもお話し頂きましたが、本社へ入ると黄綬褒章の額が飾られており、また、会議室にも多くの表彰額が飾られているように、秀でたものづくりとその企業経営が高く評価されている証であり、いかに他にない食品機械を作り上げてこられたかが伺えました。

また、大阪大学の未来基金へ多大なご寄付を頂いており、また、学生時代に所属されていたボート部の艇庫や合宿所があまりにも汚くレベルの低いことに心を痛められ、自ら寄付をすると共に、新しい合宿所建設に向けて多大なご尽力を重ねられています。大阪大学のクラブなども含めた教育環境のレベルの低さを憂いておられ、大阪大学としても今後の課題でしょう。

昼食をごちそうになり歓談の後、吉田さんに京阪の枚方市の駅まで送っていただいて帰路に。

大阪大学工業会 会長
豊田 政男